2013.10

■ グローバル人材とは
■ FD開催案内
■ FD活動報告
■ スタッフからひとこと

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター

グローバル人材とは

最近とても気になる言葉があります。メディアで氾濫している「グローバル人材」という「流行語」。人・モノ・カネ・情報が国境を越えて行き交うこの新しい時代において、グローバルに対応できる人材の育成が求められるといいます。

しかし、普段何気なく使われている「グローバル人材」とは、いったいどんな人材を指しているのでしょうか。英語が話せ、欧米のビジネスルールを熟知する人がグローバル人材といえますか。あたかも自明のように語られているこの言葉ですが、その中身は必ずしも明らかにされてはいません。

誰がグローバル人材なのか？

いわゆる「グローバル人材」とは、およそ①**グローバル社会でも活躍できる日本人に加え**、②**留学生を含む海外からの高度人材**という2種類に大別できます。

育成すべき具体的なグローバル人材像に関して、もっとも広く用いられているのは、産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2012）が提示した人材像です。推進会議の審議まとめによると、「グローバル人材」の要素は、**Ⅰ.語学力・コミュニケーション能力、Ⅱ.主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、Ⅲ.異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー**という3つに集約できます。日本人向けの人材像と読み取れます。一方、外国人さえであれば、自然にグローバル人材の要素を備えているという認識も匂わせています。

なんというすばらしい人材像でしょう。しかし、語学力以外に、いずれも抽象的文言に止まっています。その原因なのか、「グローバル人材」は同じ文書の途中では忽然と「英語のできる」人材にすり替えられました。Ⅰ～Ⅲの「資質・能力は単一の尺度では測り難い」ため、「測定が比較的に容易な」語学力を基軸にして、「他の要素等の「内実」もこれに伴うものを期待」するといいます。このように、教育現場で現在挙って取組んでいるのは、外国語（英語）教育の充実となっています。

グローバル人材＝英語力？

英語教育の抜本的強化が高等教育の現場で着々と進められています。TOFEL成績を大学の受験や卒業の要件とする自民党教育再生会議の提案が見送られたものの、TOFELなどの外部試験を活用する大学が確実に増加しています。英語による授業も政策的に推進されています。2008年にまとめられた教育再生会議の最終報告書において、英語による授業の大幅増加が直ちに実施に取りかかるべき大学改革の事項とされました。そこでは、大幅増加の目安として「当面30%を目指す」という目標が立てられました。留学生を引き付ける目的のほか、日本人の英語力の向上も期待できるという。かくして、日本人と留学生という2種類のグローバル人材の育成を促進するために、英語による授業の効果が高く期待されています。

しかし、英語による授業ははたしてグローバル人材の育成に効果があるのでしょうか。その先進校である国際教養大学等は、高校生からも企業からも人気が高いです。英語による授業の成功例とも言えますが、進学者の英語力がもともと高いということを考慮すれば、その養成方式はすべての大学に普及するのが困難でしょう。そして、日本の留学生の9割以上が非英語圏の東アジア出身であることに鑑み、同じく非英語国家の日本で英語による授業の効果も相当疑問です。残念ながら、日本の大学で英語による授業の効果を検証する研究は、現在まだ見当たりません。

両角（2013）が講義の英語化をいち早く進めた韓国の事例を検証して、英語の講義は英語を母国語とする学生にはレベルが低すぎ、そうでない学生には理解が難しいという中途半端な結果に終わるケースが多いと紹介しました。大学教育の国際化の背景が日本と似ている国の経験であるだけに、日本は慎重にグローバル化に対応した大学教育のあり方を模索していくことが重要でしょう。

中国では、国際通用性が高いとされる医学、工学、経済分野において、英語による授業が各大学の中で急速に普及しています。その効果はいかなるものでしょうか。上海交通大学は、学生の学習効果について、英語による授業を実施する機械工学実験クラスと従来の養成方式を行う伝統クラスとの比較を試みました。伝統クラスの学生は、厳しい選抜試験を経て選ばれた実験クラスの学生と比べ、1年生の時点では各種の能力が若干劣っていました。しかし、4年生の時点になると、すべての能力得点に関して、前者が後者を上回るという逆転が確認されました。中でも伝統クラスの学生は、自己学習能力と批判的思考能力が特に抜きんでています。インターンシップと双方型の教育を実施した効果だろうと推測されています。逆に英語による授業は、教員、あるいは受講者の英語力の制限で、学生が講義内容を十分に理解できず、その後の専門教育全体の履修に影響してしまう可能性が指摘されました（楊頡・喩丹2013）。

グローバル化人材の育成が、英語教育さえ取り入れれば実現できるものではなく、その他にも重要な能力の育成が必要であるということを見事に証明してみせました。

学生の学習効果を上げるには、どのような授業が有効な

のでしょうか。東京大学の「全国大学生調査」（2007年N=48,233）の結果によれば、学生の理解や興味を学習に結び付ける誘導型の授業や、学生の小論文へのコメントなどの**参加・双方型の授業**が大きな効果を持っているといいます（金子　2013）。これは、上海交通大学の研究結果と一致している内容です。

グローバル人材になるには？

それでは、英語よりも大事な能力とはなんでしょうか。筆者はグローバル人材育成推進会議が提起した「グローバル人材」のⅡとⅢの要素だと考えます。どこかで見たことがある内容ではないでしょうか。実は、小学生の学習指導要領、大学生に要求される「学士力」、さらに経産省が主張する「社会人基礎力」の中に、いずれもⅡとⅢの要素と似たような能力が強調されています。大学の共通教育がまさにこれらの能力の育成を主眼として実施されているものです。外国語（英語）教育があくまでも共通教育の一部であり、明確な評価基準が設定しがたいその他能力の育成をもっと重視する必要があるのではないでしょうか。

一方、経団連の「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート調査」（2011年、n=584）では、企業は「外国語によるコミュニケーション能力」を備えた者が望ましいという意見を挙げたものの、大学者採用時にもっとも重視する能力は、「外国語能力」ではなく、「主体性」、「コミュニケーション能力」と「実行力」などの「汎用的技能」、「社会人基礎力」であります。それなら、英語教育は虚像に過ぎないでしょうか。

「グローバル人材」＝「英語のできる人」と短絡的に考える人がきっと多くはないでしょう。しかし、評価重視の今日において、英語力・英語による授業は都合のよい評価尺度として用いられていることも事実でしょう。その評価はグローバル30、グローバル人材育成推進事業などのような大型競争的資金の獲得に直接繋がっています。結果としては、多くの大学が英語教育ばかりに目を奪われてしまいました。

かといって、英語は本当に大事ですね。これが来日11年のこの私が痛感したことです。

【参考文献】
Scott.P.(1998)The Globalization of Higher Education, The Society for Research into Higher Education & Open University Press, Published by SRHE and Open University Press, pp.123-124.
黄福涛（2002）「高等教育の国際化に関する研究の展開－比較的な視点－」『大学論集』広島大学高等教育研究開発センター、29-41頁。
両角亜希子（2013）「急激な”国際化”は何をもたらすか―韓国の事例から」『中央公論』2013年2月号、64-69頁。
金子元久（2013）『大学教育の再構築―学生を成長させる大学へ』玉川大学出版部。
楊頡・喻丹(2013)「上海交通大学工程教育課程改革成効分析―基於学生学習効果評価的反馈」第6回日中高等教育フォーラム発表資料。

（李　敏　LI Min）

お知らせ　青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズ　開催案内

*日　時：平成25年10月30日（水）16：20～17：50
*テーマ　：第2回「学生がより学ぶために，私たちができる基本的な工夫」
*講　師：金　早雪（経済学部教授）　加藤　善子（高等教育研究センター准教授）
*会　場：【メイン会場】松本キャンパス旭会館３階大会議室
※教育学部・工学部・農学部・繊維学部のＳＵＮＳ会議室に遠隔配信を行います。

第2回目の今回は、「学生がより学ぶために、私たちができる基本的な工夫」をテーマとして開催いたします。どうすれば学生がより積極的に学ぶようになるのかという課題は、なかなか解決しない難問ですが、学生を受け入れる大学が、また個々の授業で、効果が上がる具体的な取組や基本的な原則は存在します。今回は、その原則を解説した上で、それに則った実践を、経済学部の先生にご紹介していただきます。また、後半では参加していただく先生方から、効果を出している実践もご紹介いただきます。参加申込みの必要はございませんので当日はぜひご参加ください。
※ 続けて、第３回「大学生の動機づけを考える―教育心理学の観点から―」（１１月１２日（火）１３：００～）、第４回「大学生の理解を考える―教育心理学の観点から―」（１１月２９日（金）１４：４０～）は教育学部島田教授を講師に迎え、開催いたしますので、そちらもぜひご参加ください。

活動報告　2013年度信州大学FDカンファレンスを開催しました

▲講師の吉原先生

「2013年度信州大学FDカンファレンス」が9月10日（火）・11日（水）の1泊2日の日程で、筑北村の冠着荘にて行われました。今年度は「学生が真に学ぶためのしかけとしくみ」というテーマで、学内10部局から、36名の参加がありました。

今年度は，講師として兵庫大学から吉原惠子先生をお迎えし、1日目には「大学生はどこで何を学んでいるのか―学習成果としての汎用的能力―」をテーマに全員参加の講義をしていただき、2日目には「ジェネリックスキルを個々の授業科目の達成目標に入れ込むには」というテーマでワークショップもしていただきました。また、高等教育研究センターおよびアドミッションセンターの教員が講師となり、「組織の目標、私たちの目標」、「GPAを活かす成績評価―シミュレーションから見る期待と課題―」、「信州大学の学生について」、「アサーション・トレーニング」、「アドミッション・ポリシー（AP）と教育の質の保証」をテーマに、FDを行いました。

どの分科会もグループワーク中心だったため、終了時のアンケートでは、「他学部の教員と意見交換ができてよかった」という感想が多く寄せられ、普段話すことのない他学部の教員との交流の場となる等、有意義なFDとなりました。

スタッフからひとこと

「ヒッグス粒子の発見とノーベル賞」
10月8日に今年のノーベル物理学賞の発表があった。「ヒッグス粒子」の存在を提唱者した二人が受賞した。この理論が発表されたのはほぼ半世紀前で，その存在を正式に報告した論文が出たのは，つい先日である。理論は実証されることで強い説得力を持つ。もちろん物理学以外の世界でも，…。（副センター長　矢部正之）

信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 高等教育研究センター
■〒390-8621　長野県松本市旭3-1-1
■TEL：0263-37-2194（担当：学務部学務課教務グループ）
■MAIL：campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp
■URL：http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/